



公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104-0061 東京都中央区銀座7-16-12 G-7ビルディング9階
☎ 03-3541-4771 FAX 03-3541-4783 <https://www.jcancer.jp/>

主な
内容

- 2～3面 RFLJ2019各地からのメッセージ
4～5面 がん相談ホットライン年報
8面 がん征圧ポスター
デザインコンテスト

患者支援の新たな活動への助成を公募

3年間で1千～2千万円を草の根活動の団体に 休眠預金の社会貢献活用で日本対がん協会が資金分配団体に

金融機関の口座で10年以上出し入れがない「休眠預金」を社会貢献に使うための「資金分配団体」に日本対がん協会が選ばれた。12月からがん患者支援に関する新たな活動を行う民間団体への助成公募を始め、3年間で1千～2千万円を5団体前後に助成し、がん患者支援の活動を後押しする。

助成の対象は、がん患者支援にかかわる草の根の公益的活動を行っている民間団体で、複数団体でコンソーシアムを作った応募もできる。

助成の分野は①がん患者の就労支援②AYA世代(思春期若年成人)や小児のがん患者、希少がん患者、障害者のがん患者らの支援③新たながん相談体制の構築——のいずれか、またはこれらに関連した分野の患者支援事業。各団体の従来の活動への助成ではなく、新規の活動が対象となる。

応募には事業計画等の提出が必要で、詳細についての応募要領、申請書等は12月中旬までに日本対がん協会のサイト(<https://www.jcancer.jp/>)

で公開される。

大阪で12月10日に、東京で12月13日に必要な手順などについての説明会も開催。応募期間は12月から2020年1月までで、提出された事業計画が協会内に設置される審査委員会で審査され、2月に決定、助成開始される。

今回の助成について日本対がん協会としては、民間団体やNPOなどが協力し合って新たながん患者支援の形やその広がりに繋がる事業を提案、応募してもらえることを期待している。

休眠預金の活用について

今回の助成は、金融機関の口座で10年以上出し入れが確認できない「休眠預金」を活用して民間の公益活動を促進することを目的として2018年に施行された「休眠預金等活用法」に基づく制度として初めて実施されるもの。国から交付された休眠預金の指定活用団体として「日本民間公益活動連携機構(JANPIA)」が19年に選ばれ、JANPIAではその休眠預金を公募した「資金分配団体」を通して、個々の事業を行う公益活動を行う「実行団体」に助成する仕組みとなっている。

資金分配団体も公募され、全体で22団体が選ばれ、がん患者支援に関する活動への助成を企画・設計した日本対がん協会が、その一つとなった。今回の助成公募は、個々の事業を行う「実行団体」の募集となっている。

がん相談ホットライン 祝日・年末年始を除く毎日
03-3541-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3541-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
社労士による就労相談(要予約)
予約専用 03-3541-7835

日本対がん協会は医師による面接・電話相談と社労士による就労の電話相談(ともに無料、電話代は別)を受け付けています。予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までです。医師による相談は電話が1人20分、面接は30分、社労士による電話相談は40分になります。詳しくはホームページ(<https://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

特集

リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ) 2019 各地からのメッセージ

ごあいさつ

2019年度のリレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)は、全国48地区で活動が行われました。ご支援、ご協力いただきました皆様には、改めまして厚く御礼申し上げます。

がん征圧を目指し年間を通して活動を行ないますRFLですが、その集大成として2日間にわたり行われるリレーイベントは今年度、台風の影響を受けて、大分(大分市)、ぐんま(前橋市)、滋賀医

科大学(大津市)の3地区で中止を余儀なくされました。

しかし、適切な対応をしていただいたことにより、沖縄うらぞえ(沖縄県浦添市)をラストに、全イベント大きな事故も無く、無事終了致しました。

今年度、新たに三重県松阪市(県内初)と大分県中津市(県内2カ所目)の2地区で新たなRFLJが始まり、多くの仲間が増えました。

また、福島(福島市)、茨城(茨城県つくば市)、岡崎(愛知県岡崎市)、えひめ

(松山市)の4地区で節目の10年目を迎えることができました。国内における拡がりや定着をみせています。

そこで、今回は、新たに仲間に加わったRFLJ三重実行委員会と10年目を迎えたRFLJ福島実行委員会の取り組みをご紹介します。

是非、ご一読いただき、その想いを共有していただければと存じます。

RFLは、その活動を通して人と人との絆を生み、新たな感動を生む場となっております。その絆を広げる事に

り、がんと向き合う勇気と生きる希望の持てる地域社会を築いていく活動でもあります。このRFLの活動につきましては、RFLのホームページ(<https://relayforlife.jp/>)またはフェイスブックをご覧ください。

今後とも、「がん征圧・患者支援チャリティー活動」であるRFLJに、ご支援、ご協力賜ります様、お願い申し上げます。

(日本対がん協会リレー・フォー・ライフ担当マネジャー 平野登志雄)



昨年は台風で中止となった「RFLJ室蘭」のサイバイバーズラップの様子

初開催終え、「また来年なー！」

「こんな素敵なイベントが各地で行われているらしいよ。三重県でも開催したいと思うのだけだ」。仕事の先輩からこう切り出されたのが約5年前でした。まずはどんなイベントか知るのが大事とお隣のRFLJ岐阜に参加をしました。その時に、後にRFLJ三重の実行委員長となる大西幸次さんと出会い、「三重県で開催したいですね」と話したのが2015年10月10日でした。

それから4年の間にRFLJ岡崎にお邪魔したり、RFLJスタッフパートナーの大菅善章さんと打ち合わせをしたりしましたが、先頭に立って実行委員長をしてくれる人もおらず、心が折れて何度となく挫折しそうになりました。そんな中で、大西さんから「来年3月からなら何とか実行委員として時間が作れるかも知れない」と言われました。「それなら私も頑張ってお手伝いをするからこの1年間一念発起して頑張ろうよ」と話し合い、

18年11月に説明会を行って12月に実行委員会を立ち上げました。

実行委員会を立ち上げてから場所が決まるまでに相当日数がかかり、一時は、実行委員の中にも今年度の開催は難しいのではと言う空気が流れ始めましたが、大西さんが実行委員長として奔走され、とても素晴らしい松阪市総合運動公園での開催が決定しました。

しかし、決定したのは開催予定日の3ヶ月ちょっと前。今から何をすればいいのか、焦りしかありませんでした。それでも実行委員で役割分担をし、各々が創意工夫をし、チーム、ボランティア説明会では改良すべき点を提案してもらい、ベストな状態で開催に至ったと思います。不安であったお天気も予報に反してゴール時には晴天で暑いほどでした。動くリアルでるてる坊主が頑張ってくれたおかげです。

撤収時には、参加者の皆様もお手伝いいただき、最終ゴミ拾いまでしていただき、会場を借りる前よりも綺麗に返せたのではないかと考えるほど綺麗にして、笑顔で帰って行かれました。



開催されたRFLJ三重事項委員会のメンバーら

RFLJ三重のシンボルマークである三

RFLJ三重実行委員会事務局長 山原 英子

つの笑顔、三笑がたくさん見られて本当に良かったです。

「また来年なー」。そうって帰って行かれたことで開催した意味を深く感じました。大変ではありましたが本当に素晴らしいRFLJ三重だったと思います。

初開催を終えて至らない点、反省点、多々ありますが、怪我もなく体調不良を訴えられる方もなく、無事に終わられたと思います。リレーは続けて行ってこそ、との思いで反省会も行いました。準備万端とは行かなくても1回目は何とか開催できましたが、2回目以降の事も考えなくては行けません。真剣に取り組んだからこそその反省点が多数でした。来年度もまた、熱くリレーを行えそうです。御協力頂きました全ての方にお礼を直接いいたいところですが、ここでお礼をしたいと思います。

RFLJ三重にご協力頂き本当にありがとうございました。

また来年なー！！！！



エンブティテーブルとルミナリエ

10周年迎え、初心忘れず継続へ

おかげさまで、10歳になりました。

2010年から始まり19年の今年で10周年を迎えることができました。RFLJ福島を支えていただいたすべての皆様のおかげです。

何もない状況から大きなイベントを実行する事は並大抵ではなかったと思います。10年の第1回は、「コツコツ種をまき、みんなで育て、ひとつの事を実行する」という強い想いに共感する仲間と開催する事ができました。

翌年の11年3月、東日本大震災が発生しました。よちよち歩きでしっかり地に足をつけて行こうと言う時の出来事だったため、実行委員から「今年の開催は無理なのは」という声があったのも事実です。

福島の場合、原発の問題があって屋外開催はできませんでした。開催をやめるのか、継続するのか。実行委員会で「動き出した命のリレーの歩みを止めない」「規模が小さくても続ける」「場所は、どこでも出来るじゃないか」と論議を重ねた結果、桑折町の体育館での室内開催が決定しました。

その後、12年以降は室内開催を続けています。初心を忘れない。何のために、誰のために開催するのか。原点に立ち返り力強く進めてきました。

昨年、10周年がまじかに迫り、「リレー・フォー・ライフ(RFL)の発祥の地で

あるアメリカの都市タコマへ参加者全員で行こう」と新たなイベントを考えました。会場のトラック1か所にカウンターを設置し、1周歩くたびに全員でカウンターを押し、そのカウント数を距離に計算して現地まで歩くというイベントを行いました。

会場の壁には、日本とアメリカの都市タコマの地図を掲げ、みんなが今どの辺まで到達しているかがわかるように、実行委員長のミニチュアを模型で作って到達状況をリアルに表現し、見事タコマまで行くことができ、達成する事ができました。

今年の10周年では、「タコマから実行委員長を戻さないといけない」という事がわかり、再び、参加者全員でトラックを歩き、見事、実行委員長を日本まで帰還させることができました。

今年はさらに出来事がありました。それは、映画スター・ウォーズのキャラクターに扮して色々なイベントに参加し活動を盛り上げる「501st日本部隊」が福島に登場したことです。部隊メンバーの1人ががんサイバイバーで、RFLをとっても応援しているとの事。「元気で笑顔を届けたい」と言っていました。

最後にもう一つ、RFLJ福島には「なくてはならない存在」があります。それは、地元三育幼

RFLJ福島実行委員会実行委員長 渡邊 忠



RFLJ福島のサイバイバーズラップ

稚園の子ども達によるマーチングバンドです。初回から元気に参加をしていただいています。親御さんにも参加をしていただきRFLを分かっていたく為でもあります。10年当時、4歳で参加した子どもも今は中学生です。感動です。この活動は永久に続きます。将来、三育幼稚園の子どもが成人し、RFLJ福島の実行委員会のメンバーとして盛り上げる日が必ず来ます。その子どもたちに「命のリレー」のバトンのリレーが出来るように、「初心を忘れず」継続していきます。

RFLJ福島を応援いただいております全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。



初回から参加の三育幼稚園のマーチングバンド

がん相談ホットライン2018年度年報

年間相談件数 **9611** 件症状・副作用・後遺症の相談がトップ
治療法決定に関する悩みも

看護師と社会福祉士による電話相談の「がん相談ホットライン」の2018年度年報がまとまった。「がん相談ホットライン」は、看護師と社会福祉士によるがん患者・家族支援事業で、「誰かに気持ちを聞いてほしい」「不安で仕方がない」など、医師だけではカバーできないような、患者や家族の幅広い悩みをサポートするために2006年に開設された。2018年度の年間相談件数は9611件。前年度比90.9%で、5年ぶりに1万件を割った。17年末に事務所の移転で電話番号が変わったことやインターネット上で患者が交流できる場

が増えてきたことなどの影響もあるとみられる。

18年度の相談件数を月別で見ると、月平均件数801件だった。相談者の性別では女性が75.6%、男性が24.4%と、女性が3分の2を占め、例年と変わらなかった。年代では50代が23.4%と最も多く、次いで40代が18.5%、60代が17.6%、70代が11.8%と続いた。

相談の疾患部位は乳房が28.5%で最も多く、次いで大腸12.6%、肺10.0%、胃6.2%と、罹患数の多いがんが上位を占めた。

相談の内容では、1つの相談には複

数の問題が絡んでいる場合が多いが、主な相談項目としては「症状・副作用・後遺症」が2546件(26.5%)で最も多く、「治療」が1972件(20.5%)、「不安などの心の問題」が1916件(19.9%)と続いた。相談項目の上位3つの年度推移は前年度とほぼ同様だった。

ただ、1人の相談内容の中で出てきた相談項目をすべて集計すると、「不安などの心の問題」が41.7%と最も多く、次いで「症状・副作用・後遺症」が35.9%、「治療」が28.3%となった。

今年度相談員が気になった相談

遺伝子パネル検査についての相談

大腸がんや乳がんなど一部のがんで、医師が必要と判断した場合に、保険診療で少数の遺伝子を調べる遺伝子検査をして、診断や治療に活用することがすでに行われていたが、2019年6月からは、がん組織の多数の遺伝子を同時に調べる「遺伝子パネル検査」の一部が保険診療として、標準治療がないまたは終了したなどの条件を満たす場合に行われるようになった。検査の結果、遺伝子変異が見つかり、その遺伝子変異に対して効果が期待できる薬がある場合には「がんゲノム医療」としてその薬の使用が検討されるが、遺伝子変異が見つからない場合があり、見つからなくても必ず治療がある訳ではない。

こうした状況で、ホットラインに来る相談にも遺伝子パネル検査に関するものが目立ってきた。「これは、どんな検査ですか」といった単純な質問がある一方で、標準治療をやりつくし、治療が難しい状況の中でこの情報にたどり着き、一縷の望みを抱く人もいる。また、「無駄な治療はしたくないので、遺伝子検査を受けたいうえで治療をしたい」「最初から効果が高い治療をしたい」「どうしても副作用を避けたい」「再発した時に備えて、今からパネル検査

をしておきたい」など、条件に当てはまらないケースの相談もあった。

ホットラインでは、誤解している人には正しい情報を伝え、具体的なことを知りたい人には、わかりやすく説明している。必要があれば主治医への相談の仕方を話し合い、相談者が納得して行動できるよう支援している。

治療を自己決定する難しさ

治療選択の時、最近では主治医が詳細に説明したり、パンフレットを渡して解説したりするなど、十分に情報を伝え、「あとは自分で決めてきてください」と、患者に考える時間が与えられることが増えている。そうした中、ホットラインには「いくら考えても決められない」といった電話もかかってくる。

がん治療は、データがあっても個人差があるためやってみないとわからない。患者にとっては100%ではない治療効果、起こるか起こらないかわからない副作用や後遺症も含めて考え、医師と相談しながらも自分で決めなければならない。そうした中、「治るなら辛い治療も受けるが、そうではないから踏み切れない」という相談や、副作用を避けたいため、より詳細な副作用のデータや対策を知りたいという相談が寄せられる。

命がかかっているから悩むのだが、助かればいいというだけではなく、治療後の生活も大事だと考える人が増えていると感じる。

命や生活に関わるがん治療だからこそ、治療を決める時には何度も迷ったり、決心が揺らいだりしながら気持ちを固めていく。そういう過程に寄り添って考えを整理したり、足りない情報を補ったりする役割を担う部門が、がん診療拠点病院にあるがん相談支援センター(無料)やがん看護外来(保険診療)などだが、それを知らない人もいるし、実際に相談しても、何度も相談するのは躊躇するようだ。

ホットラインでは主治医の説明をどのように理解しているかを確認し、状況に合わせて情報の選び方やその人が得た情報をどう解釈するかを一緒に整理し、本人の価値観や生活にとってどうなのかを考える手助けをしている。

また、必要に応じてセカンドオピニオンや通院病院への相談の仕方、治療に関わる医療職の活用などを助言し、相談者が自分の人生にとって最善の方法を決定できるよう支援している。

「何度も相談しています」と電話してくる人も多いが、「何度でも良いですよ」と伝え、揺れ動く相談者の気持ちに寄り添うようにしている。

◎ 相談者からの感謝の声 ◎

2018年度にホットラインに電話してきた相談者からは以下のような感謝の声をいただいている。

○再就職とがん告知の時期が重なって混乱した方 夢に向かって歩み始めた矢先のがん告知。仕事と治療スケジュールの調整など、どうしていいかわからなくなってしまったが、これからの自分の人生の在り方を話せたことで気持ちの整理ができ、進むべき方向がわかった。

○再発治療で入院中の方 家族と口論になり、自分が決めた治療に反対され、選択が間違いなのかと自信がなくなっていたが、話すうちに大丈夫と思えるようになり落ち着いた。ホットラインの方は皆優しいだけでなく、適確なアドバイスもしてくれてありがたい。ここがなかったらどうなっていたか。

○治療の後遺症に悩む方 治療後の生活が後遺症のせいで行動に制限があったり、自分の容姿に対する他人の目が気になったりして、どうやって症状と付き合っていくか悩んでいた。話すうちに色々な解決方法がある事や、一般の人は自分が思うほど人の容姿に関心がないことに気づき、

明るい気持ちになれた。ちゃんと聞いてくれてありがとう。

○治療が終わっても、病気を受け入れられなかった方 がんになってからこれまで、どうしてがんになってしまったんだろうと悩み続けてとても辛かったが、ホットラインで話したら、気持ちを切り替えることができた。不安で沼に沈んでいるような気分だったが、前向きになれた。ホットラインに相談して良かった。

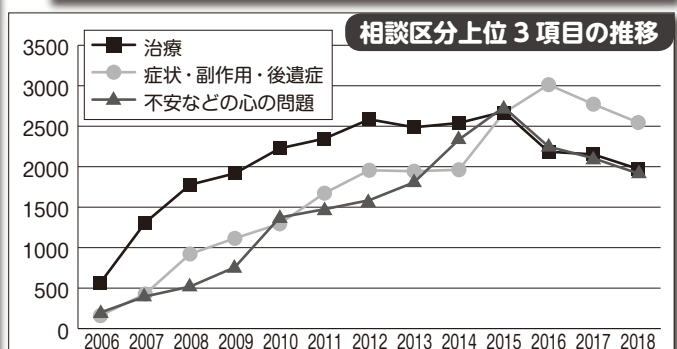
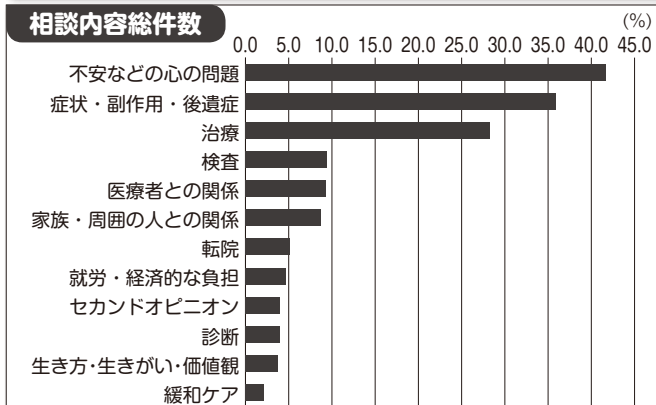
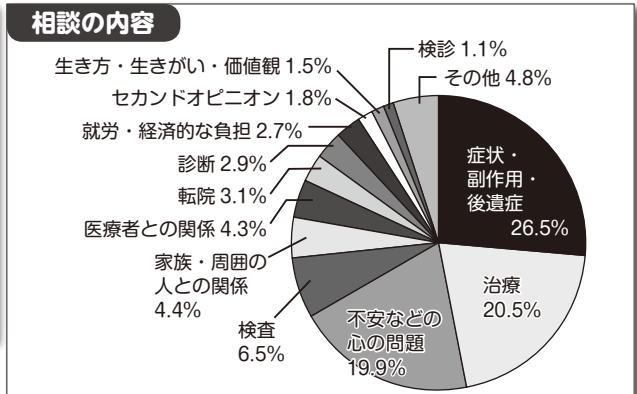
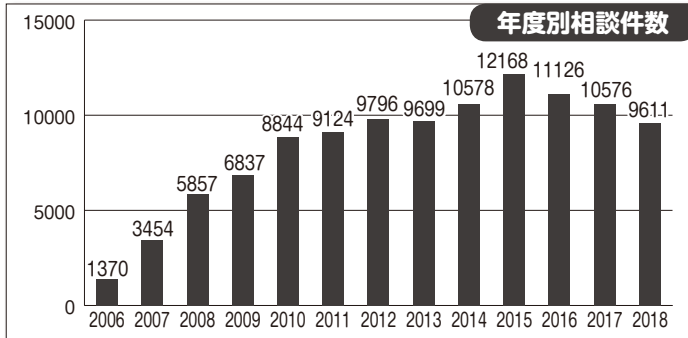
○経過観察の検査で異常が見つかった方 毎回の検査のたびに再発の不安があり、ちょっとしたことにも過敏になっている。今回初めて追加検査になり、心配で精神崩壊しそうだった。他の相談窓口で相談したことは何回もあるけど、こちらは違う。羽毛布団のように受け止めてくれる。優しい。なんて言っていないかわからないけど、とにかくありがたい。

○娘のがん治療を応援したい母親 がん治療を頑張る娘に母として何かしてあげたいが、大人として立ち回っている娘との距離感に悩んでいた。相談するうちに、現在既にやっていることのひとつひとつが娘のためになっていることに気づかせても

らい、ほっとした。娘にもホットラインを教えたい。

○夫の治療が延期になり、今後の事が心配な妻 夫のがんになり治療を決心して入院したが、病状が思わしくなく延期になっている。主治医から家族だけに話があるというので、どういうことを聞けばよいかホットラインに電話した。家族だけにということは病状的に厳しいのではと感じ、誰にも相談出来ずに途方に暮れていた。今日は相談したかったことだけでなく、今後の事、本人の気持ち、家族のことなど、いろいろなことも相談できた。こういうところがあって本当に良かった。

○末期の母を在宅でケアしている方 仕事をしながらがんの親を看ているが、今出ている症状のケアの事、今後の療養場所の事などで迷ってしまい電話した。自分のやっていることを認めてもらえて安心したし、身体も気遣ってもらえた。また、話をしながら自分でどうすればいいか整理ができ、聞いてもらって良かった。また相談したい。



部下ががんになった場合の対応の研修会開催

職場でのサポートを議論

部下に突然「がんになりました」といわれたら、どう対応したらよいか。そうした場合の対応を学ぶ研修会を日本対がん協会は11月6日、朝日新聞社の管理職研修会の中で共催した。

研修会は「がんを知り、部下が『がんになった』場合の対応を考える」と題して実施。がんになったことがわかり、当時勤めていた会社から退職勧奨を受けた経験を持つ横山光恒・日本対がん協会がんサバイバー・クラブマネジャーの司会で、大野真司・がん研有明病院副院長、乳腺センター長と、肺がんのサバイバーの電通社員でLAVENDER RING発起人の御園生泰明氏を講師に、講演と参加者によるグループワークを行った。

がん再発へ正しい理解を解説



講演する大野氏

まず、大野副院長が「がんは『治る』、『治らない』の二者択一ではない、がんを知ろう」と題して講演。クイズ形式で、がん治療を受けた人の3人に1人が再発する割合であることや、再発した時に仕事を継続できる人の割合が10人中10人であること、再発した人で心のケアが必要な人の割合が3人に1人であることなど、がんの再発に関するデータを紹介。仕事をしていてがんが再発した人は、そのとき体は元気だが、精神的にはケアが必要な人が約3分の1いる現状をまず知ってもらいたいと語った。

さらに、がんになった人の3分の1が就業中の時代になり、その3分の1が再発するという状況であることを知った上での対応がこれからの課題であることや、再発した人のサポートがまだまだ足りないことを解説した。

一方で、「希望が再発がんに打ち勝っていき力になっていることから、職場としてはそこにどうかかわっていくか、人によって異なり、答えはないだろうが、そのことを考えてもらいたい」と強調した。

上司の理解と周囲のサポート

その後は、御園生氏が「仕事と治療を4年間両立できている理由」と題して講演した。2015年にステージⅣの肺がんが見つかり、どうしたらよいかを電通の上司に相談したところ、「オープンにした方がいい」といわれ、上司が御園生氏の状況や治療と仕事へのサポートの必要性を同僚や取引先にメールなどを通してうまく広めてもらったことを紹介。周囲がサポートできることを治療の状況に合わせて具体的に3段階に分けて職場内で共有するなど、上司が組織内で「治療と仕事を両立して良い」「応援しよう」という空気を作ってくれたことで安心感が得られたことを説明した。

さらにがんになっても生き生きと暮らせることを伝えるLAVENDER RINGというボランティア活動の立ち上げにも上司が支援してくれ、精神的にも安定し、仕事にも集中できるようになったことを紹介。会社の制度やツールをうまく使うことができ治療中も柔軟な働き方ができたことなど、治



講演する御園生氏

療と仕事が両立できた理由を示し、参加者らに「部下からがんになったと言われたらどう行動するのか、その日のために想像しておいてもらいたい」と語った。

講演後には参加者から、がんになったことは部下から口外しないようにいわれた時の対応の質問があり、御園生氏は「言っても言わなくてもいいという空気が大事」「選択肢を与え、一緒に考えてあげるのが大事」などと答えた。

よく聞き、一緒に考える

この後は、参加した管理職24人が4グループに分かれ、部下からがんになったといわれたときに、上司としては何が一番の対応かについてグループディスカッションを行った。

参加者からの代表発表では、上司に求められていることとして「基本的に本人からの話をよく、ゆっくりと聞き、一緒に考えていく姿勢を示し、職場に理解を広げる」「本人が周囲にがんのことをオープンにするのかしないのかによらず、周囲がサポートできる環境を調整し、作る」「サポートできる職場の空気をつくるなど、上司しかできないことをきちんとやる」「制度も含め、支える環境も広がっていることを伝える」などの意見が出された。

周囲のサポートです。治療にあわせての3つのサポートがあります。

- A 普通にみなと一緒に行動できる。治療のとき(平日)だけ病院に行く。病院用の時間の確保のサポートをする。
- B 体力の回復などのために、1/3くらいは休息をとったり治療をする。そのための時間の確保だけでなく移動など手伝えることを全てサポートする。
- C 全面的に治療に自分の時間を100%専念してもらう。それが出来るように、本人の会社の手続きなどのものを全てこちらでやれるようにサポートする。やれることは全てサポートする。

3段階のサポート
御園生氏が紹介した

日本対がん協会では、部下ががんになったときの上司の対応についての研修会を、がんと仕事の両立を支援する事業として、企業の管理職研修などで今後協力していくことを検討している。

がんになった経験を社会に活かそう 就労イベント・プログラム開催

日本対がん協会と
日本キャリア開発
協会が共催

日本対がん協会は勤労感謝の日の11月23日、働く世代のがん患者向けイベント「がんになった経験を社会に活かそう～自分のため・誰かのため」を、国立がん研究センターで日本キャリア開発協会と共催した。

がんになった後もだれもが安心して、自分らしく働き、そして生きる社会を実現する懸け橋になるイベントとして企画されたもので、がん患者や家族、支援者、キャリアコンサルタントら175人が参加した。

イベントは2部構成で、第1部ではNPO法人がんノート代表理事の岸田徹氏、ピアサポート活動を続けているピアリング理事のふくだゆう子氏、人事コンサルタントでofficeクマクラ代表の熊倉宗一氏、日本対がん協会などでがんの就労相談を行っている社会保険労務士の近藤明美氏、日本キャリア開発協会のキャリアコンサルタントの砂川未夏氏の、いずれもがんサバイバーである5氏が登壇。がんが分かったときの当時の勤務先での対応などをそれぞれ自己紹介しながら、働くがん患者の状況について議論された。

会場の参加者も各個人のスマートフォンを使って、がんと診断されたとき、会社に伝えたか、だれに伝えたかなどの質問にその場で回答。岸田氏の司会で、9割の人が会社に伝え、8割以上の人が上司に伝えたといった回答を紹介しながら、双方向で議論を進めた。

職場内の対話で 働きやすい環境を

議論の中で砂川氏は、29歳で悪性リンパ腫がわかったときは、当初はすぐに診断がつかなかったことや、その後診断がついた後は言うのが怖くなって会社には言えなくなった経験を語った。また、SNSで患者の書き込みも受けているふくだ氏は、その書き込みなどから、病気の事を言いやすい環境になってきた一方で、わかったらクビになるかもと心配して、職場でがんのことを誰にも言えず隠している人は

たくさんもいると思う、と指摘。「上司にだけ言って同僚には何も伝えず頑張って働いている人も実はすごく多いのでは」と話した。

職場の側もがん治療後職場復帰してきた人にどう声を

かけていいのかわからない人が多いことや、患者の側もどこまで職場の人に話していいのかわからず、互いにモヤモヤしている状況があることも議論になった。近藤氏からは、それには対話が大変で、職場の中でその橋渡し役になれる人の必要性も示された。

営業職をしていた47歳のときに胃がんがわかった熊倉氏は、治療2年目に社内報で自分のがんをカミングアウトしたところ、まわりから自分もがんだと声をかけられるようになったことを紹介した。ふくだ氏は、がんという働きたくないと思ってしまう上司がいる一方で、元気そうにみえる人に対して業務をすごく振ってしまう上司もいる、と指摘。対話して、その人が働きやすくなる環境をつくってほしいと訴えた。

働く相談窓口の活用を

第2部では、「色々なサポートの形を知ろう」と題し、近藤氏が社会保険労務士として、日本対がん協会で行っている就労相談について、ハローワーク飯田橋の就職支援ナビゲーターである岡田晃氏がハローワークでのがん患者の就労に関する相談や就職支援について、砂川氏がキャリアコンサルタントとしての就労相談について、それぞれ解説した。

この中で近藤氏は、サバイバーからの相談は①現状や今後の働き方について②がんについて職場への伝え方について③社会保険制度の3つに大別できることを説明。中でもどうやって会社に伝えれば理解されるのかといった相談が多い一方で、周囲にあまり言わずに働き続けていくにはどうしたらよ



岸田氏の司会による第1部の議論の様子

いのかという相談も実は多いことを紹介した。

社会保険制度については、情報があふれている中で、自分自身が使える制度の活用がわからないという相談が目立つという。がんの治療の段階によって困りごとが変わっていくとして、日本対がん協会の相談窓口の活用を説明した。

ハローワーク飯田橋の岡田氏は、がん患者の再就職支援や相談の相談窓口が都内ではハローワーク飯田橋以外に国立がん研究センター中央病院と都立駒込病院にもあることを紹介。就職の相談に来る人では病名の開示についての質問が多く、そこでは病名を自分から開示する必要がないことを説明したうえで、相談者と話をしながら、どれを選ぶか戦略を一緒に考えていくようにしていることを説明した。

開示する場合もいつ言うかについては面接時に自分から言う例が一番多いことを紹介。面接担当者ややりとりをすれば、相手もわかってもらえるため、岡田氏はこの段階での開示を勧めた。また、自分自身が働けると自信があれば、言わないということもあると説明した。

キャリアコンサルタントの砂川氏は、就労支援の専門家であるキャリアコンサルタントには、治療後の人生の多くの選択肢の支援が受けられるとして、日本開発協会では、30分間の無料電話相談をしていることなどを紹介した。

こうした講演の後、参加者らが6人のグループにわかれて、がんになっても自分らしく働ける環境について議論もされた。

デザインのかでがんと減らそう!

第8回 がん征圧ポスターデザインコンテスト 作品募集中

日本対がん協会では、高校生以上の学生を対象に「がん征圧ポスター」のデザインを募集しています。若い世代の新鮮な感性とアイデアでがんの早期発見、早期治療を呼びかけ、デザインのかでがんに苦しむ人を一人でも減らしてください。

最優秀賞の作品はポスターにして全国の自治体や保健所、医療・検診機関などに約5万枚掲示し、副賞として10万円を贈呈します。ぜひご応募ください。

●エントリー及び作品募集期間

2019年12月23日(月)～2020年3月23日(月)

●作品テーマ 「がん検診に行こう」

●応募資格 高校生・大学生・大学院生・短大生・専門学校生

グループ応募も可(ただしメンバー全員が応募資格を有していること)

●贈賞 最優秀賞1点：ポスター化し、約5万枚掲示します。

副賞 賞金10万円

優秀賞3点：副賞 賞金1万円

●主催 公益財団法人日本対がん協会

●応募方法 コンテスト公式サイト(<https://www.jcsposter.com>)でエントリーのうえご応募ください(応募の詳細は同サイトでご確認下さい。エントリーの開始は12月23日から)

お問い合わせ：日本対がん協会(Tel：03-3541-4771)広報担当



第8回がん征圧ポスターデザインコンテスト募集のポスター



第7回の最優秀作品

がん検診の実施状況補足調査 国の指針記載のがん検診のみ指導・推奨の都道府県は約6割 厚労省

厚生労働省の「がん検診のあり方検討会」が11月13日開かれ、2018年度に実施された市区町村のがん検診に対する都道府県の指導・推奨の状況調査の結果が公表された。調査は、国が推奨している5つのがん検診について都道府県が市区町村に推奨・指導している検査項目や対象年齢、受診間隔、国の指針に基づかない部位のがん検診の指導・推奨の有無などをきいたもの。国の指針に記載された内容のがん検診のみが実施されていたのは約6割の28都道府県だった。

がん検診については、5府県が指導・推奨しており、その内訳は、秋田県が卵巣がん、山梨県が肝臓がん、新潟県と京都府、愛媛県で前立腺がんとなっていた。

また、指針で認められている胃、大腸、肺、乳房、子宮頸の5部位のがんについても、宮城県、秋田県、山形県、茨城県、福井県、京都府、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、徳島県、愛媛県、高知県、福岡県、鹿児島県、沖縄県の17府県が何らかの指針とは異なる検査方法や対象年齢、受診間隔でのがん検診の指導・

推奨がされていた。

部位別にみると、国が推奨している5つのがん検診で、国が推奨していない検査が指導・推奨されていたのは肺がんでは胸部CTが和歌山県、愛媛県、鹿児島県の3県で、乳がんでは超音波検査が山形県と茨城県の2県で、子宮頸がんではHPV検査が島根県と徳島県の2県であることが示された。

調査の詳細は以下(<https://www.mhlw.go.jp/content/10901000/000565429.pdf>)から閲覧できる。

古本で日本対がん協会に寄付ができます

読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？ 詳しくは「チャリボン」 <https://www.charibon.jp/partner/JCS/> (ISDNのバーコードがついた書籍類が対象です)

charibon by **VALLE BOOKS**

お問合せ(株式会社バリューブックス)：0120-826-295
受付時間：10:00-21:00(月～土) 10:00-17:00(日)